

氏名	大滝 優		
学位の種類	博士（医学）		
学位記番号	博甲第 8675号		
学位授与年月	平成 30年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	子供時代の親子関係が成人期のストレス対処力に及ぼす影響に 関する予防医学的研究		
主査	筑波大学教授	医学博士	齋藤 環
副査	筑波大学教授	医学博士	本田 克也
副査	筑波大学教授	博士（保健学）	市川 政雄
副査	筑波大学教授	理学博士	志賀 隆

## 論文の内容の要旨

大滝優氏の博士学位論文は、自殺念慮やストレス対処力 SOC の形成において、子供時代の親子関係がもたらす影響について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

### （目的）

著者は、子供時代の不良な親子関係が精神的健康に及ぼす影響について、その実態を明らかにすべく二つの研究を実施している。研究1で著者は、自殺予防ホットラインにおいて調査を行い、子供時代の親子関係と自殺念慮との関係を明らかにすることを試みている。また研究2で著者は、わが国の労働者において、子供時代の親子関係が成人期のストレス対処力にどのような影響を与えているかを明らかにすべく調査を行っている。

### （対象と方法）

研究1：著者は2012年の全国いのちの電話の年間データについて二次解析を行い、子供時代の親子関係の実態を調査した。調査対象は全国48のコールセンターに寄せられた未成年者からの親子関係に関する相談5,843件であり、調査項目としては性別、親子関係に関する相談内容、心身の健康問題、自殺未遂歴、自殺念慮を選んでいる。著者はすべての調査項目を共変量として、二項ロジスティック回帰分析で自殺念慮のオッズ比を求めている。

研究2：著者は子供時代の Bonding が成人期労働者のストレス対処力とストレス反応に与える影響について検討すべく、Web アンケートのデータを二次利用し、子供時代(20歳未満)の Bonding、首尾一貫感覚13項目7件法(SOC)を調査している。アンケート回答者を Bonding の良好群と不良群に分け、SOC を男女別に年齢を共変量とした共分散分析を行っている。

### （結果と考察）

研究1：著者によれば、調査期間中の未成年者の親子関係に関する相談件数は5,843件であり、性別

では男性からの相談が 5,331 件、女性からの相談が 512 件であったとのことである。自殺念慮が認められた相談は 2.7%で、相談時に自殺企図歴が認められたのは 0.8%、親子関係に関する相談の内訳では、近親姦が 2,811 件で最も多く、全体の 48.1%を占めていた。著者はこの結果について、近親姦は社会的にタブーの意識が強く、周囲に相談しにくいと推定している。親子関係に関する相談内容のなかで自殺念慮を認めたものとしては、「不満」が 41.3%で最も多く、「虐待」が 17.4%でこれに続いた。著者は「不満」という相談内容が具体的にどのようなものだったのかは不明としつつも、先行研究で指摘されている家庭の経済的問題、家族との口論、家族の行事などとの関連を指摘している。また、「虐待」と自殺念慮の関連については多くの先行研究で報告されているとして、本研究の自殺予防ホットラインにおいても同様の傾向が確認されたとしている。著者は自殺念慮の二項ロジスティック回帰分析の結果として、家庭内暴力がオッズ比 14.8 で最も高かったこと、次いで「子育て」でオッズ比が 10.7 であり、3 番目が「虐待」でオッズ比は 6.72 であったと述べている。著者は家庭内暴力や虐待において自殺念慮のオッズ比が高かったことが先行研究と合致しているとしつつも、従来は自殺念慮と関連しやすい近親姦について有意な自殺念慮のオッズ比は求められなかったとしている。この点について著者は、近親姦のような社会的にタブーとされる被害を受けて深刻な自殺念慮を抱いた場合、絶望や恥じらいの気持ちから電話相談につながらなかった可能性を示唆している。

研究 2：著者によれば、9,525 名(男性 6,042 名、女性 3,483 名)から回答が得られ、平均年齢は 42.1 ±10.1 歳であったという。さらに著者は以下の結果を報告している。Bonding 良好群は男性で 4,592 名、女性で 2,408 名であり、Bonding 不良群は男性で 1,450 名、女性で 1,075 名であった。男性に関しては、Bonding 良好群で SOC 57.2±11.7 点、Bonding 不良群で SOC 53.3±12.2 点であった。女性に関しては、Bonding 良好群で SOC 55.5±11.4 点、Bonding 不良群で SOC 50.4±11.9 点となっていた。著者は年齢を共変量とした共分散分析を行い、男女ともに有意な差が認められたとしている。

著者は、男女ともに Bonding 不良群は Bonding 良好群と比較して有意に SOC が低かった結果について、先行研究の結果と一致したとしている。また著者は、親子関係と SOC に関連がみられた理由について、GRRs と良質な人生経験の関与を想定している。著者によれば、良好な親子関係は、ストレスを処理するための GRRs を豊かにし、それによって良質な人生経験が提供され、ここには、一貫性のある人生経験、適度な負荷のある人生経験、結果形成に参加した人生経験が含まれるため、これらの要素によって SOC の形成は促進されると推定している。著者は子供時代の親子関係が不良であった結果、GRRs が乏しくなり、良質な人生経験が少なかったために、SOC の形成が促進されず、成人期の SOC が低かった可能性を示唆している。

以上の考察に基づいて、著者は労働者のメンタルヘルス不全を扱う場合にも、産業保健スタッフが子供時代の親子関係を聴取しておくことで、病態の理解に役立つ可能性があるとしている。また著者は、子供時代の親子関係が不良な労働者のケアとして、ストレス対処力が低くなっている可能性があるため、周囲のサポートなどのストレス緩和要因を充実させていくことが有効であると述べている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究は、子供時代の親子関係に起因する自殺念慮やストレス対処力 SOC の形成についての新たな知見を提供するものであり、この視点からの自殺予防、および健康の保持・増進活動に貢献するものと考えられ、博士論文としての評価に値する論文である。

平成 29 年 12 月 25 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。